

## ■関連資料 消費者の「権利」と「責任」を理解しよう

国際消費者機構では、消費者には権利と同時に責任があるとして、8つの権利と5つの責任を挙げています。消費者の権利が確立するまでには、さまざまな消費者問題が発生しました。消費者が声を上げたことで行政側が新たなルールを作り、事業者も改善に応じた事例が数多くあります。

①食糧メーデー「米よこせ大会」(1946)	②ヒ素ミルク中毒事件(1955)
<p>第二次世界大戦後は深刻な食糧危機で、生活の基本的ニーズが保障される権利が守られていない状況でした。たまりかねた労働者や主婦らが、各地で配給公団に押しかけ米を要求したり、約25万人が皇居前広場に集結して米不足の現状を訴えたりしました。</p> <p>連帯する責任、主張し行動する責任が示されました。</p> 	<p>西日本一帯で、体が弱って死んだり、肝臓が悪くなったりする赤ちゃんが続出しました。工場で、原乳の乳質安定剤に含まれたヒ素が粉ミルクに混入したのが原因でした。被害者数は全国で12,000人を超え、死亡者も100人を超える食品公害でした。</p> <p>安全を求める権利の重大さが示されました。</p> 
③水俣病の発生(1956)	④ニセ牛缶事件(1960)
<p>熊本県水俣市では1950年代前半から、猫の死亡などの異変が相次ぎ、1956年に激しいけいれんを伴う病気の発生が確認されました。原因は工場排水に汚染された魚介類を食べて発生したメチル水銀中毒で、健全な環境を享受する権利の侵害です。</p> <p>1968年、国は工場排水が水俣病の原因と認めました。認定患者は2,200人を超えます。その後も補償を受ける権利をめぐり、訴訟が続きました。</p> 	<p>「缶詰にハエが入っていたので調べてほしい」という相談があり、保健所が検査したところ、缶詰の表示は牛の絵に「ロース肉大和煮」であるものの、中身はクジラの肉でした。他の商品も調査すると、牛缶と表示しながら馬肉などを混ぜたものが大半でした。中身を知らされる権利、選びたいものを選ぶ権利が守られていませんでした。</p> <p>怒った消費者から問合せが保健所等に殺到し、この事件をきっかけに、不当な表示を規制する法律が成立しました。</p> 

## ■消費者の権利と責任の重要性が示された消費者問題

⑤一口サイズのこんにやく入りゼリーによる窒息死亡事故(1995)
<p>1995年、こんにやく入りゼリーで乳幼児が死亡した事故が報告されました。昔から餅やあめ玉による窒息事故が知られていますが、当時はこんにやく入りゼリーは新商品であり、消費者に危険が知られていませんでした。2008年までに17件の死亡事故が報告され、国民生活センターは商品テストを通じて危険性を明らかにするとともに、消費者への注意を何度も呼びかけ、安全を求める権利や知らされる権利を守りました。意見を反映させる権利に基づき、事業者には容器の形の変更や、小児と高齢者に配慮した警告表示を求めました。</p>